詩人ミール・ダルドに就て

鈴　木　斌

これ迄に続けてきたウルドゥー古典詩人の紹介も既にクリー・クトゥブ・シャー、ワリー、ミール、ソウダーそれにガーリブを終えたが今回はミール・ダルドを取りあげることにした。ダルドは一八世紀ウルドゥー古典詩の歴史にあつてミール、ソウダー及びマズハルと並んで四本の柱に例えられている代表的な詩人である。私はこの詩人に特に興味をもつているが、それは一八世紀の中葉に至つてムガル朝がナーディル・シャーの侵攻やアフマッド・シャー・ドゥッラーニーの略奪それにマラータの圧迫などによつて衰退著しくなるとミール、ソウダーなどをも含めてデリー在住の殆どの詩人や文人達が新しいパトロンを求めてアワドのナワーブの下に移つてしまうが、そうした状況下にありながら動揺せず最後迄デリーを去ろうとしなかつたのがこのダルドだからである。これはダルドがイスラームの神秘主義者スーフィーであつたことにも理由がある。しかしペルシャ文学においてもウルドゥー文学においても古来神秘主義詩人と称せられる詩人は数多く存在しているとはいえ、当然のことながら神秘主義を詠んでいる詩人と神秘主義者の詩人とは必らずしも同一ではないから、時の支配者や貴族などをパトロンとして彼らの保護下に結構な生活を送りながら一方で神秘主義思想を詩中に表現しているような詩人を簡単に神秘主義詩人と呼ぶことは誤りである。この意味でも数あるウルドゥー古典詩人の中で真にスーフィー詩人という呼び名に値するのがダルドなのであるといえよう。ではまずダルドの生涯について見てゆくことにする。

ミール・ダルドは本名をハワージャ・ミールといい一七二〇年にデリーで生まれた。彼の両親の家系は極めてスーフィー的である。即ち、父親のハワージャ・ムハンマド・ナースィルはナクシュバンディー派の重要なスーフィー、ハワージャ・バハーウッディーン・ナクシュバンドに連なり、母親はこれまたカーディリー派の祖アブドゥル・カーディル・ジーラーニーの家系に当るという。いわばダルドは父母両方から

スーフィー的資質を充分に受け継いだといえる。ハワージャ・ムハンマド・ナースィルはペルシャ詩の優れた詩人でもありアンダリーブと号した。彼はまた、ナクシュバンディー派とカーディリー派を合せて新たにムハマディヤ派という一派を創設し自らその祖となつている。ダルドにとつて諸学問の師でもあつた父親の影響がその精神・思想の形成上に如何に大きかつたかが窺われるのである。尚、詩については彼はデリー派初期の大詩人アールズーにも学んだという。

ダルドの才能は一五歳の時に最初の宗教的小冊子を書くなど早くから表われるが、彼は初めから宗教人であつたわけではなく最初はムガル朝下で軍職についている。しかし二九歳の時に父親の忠告もあつて世俗を捨てスーフィーとしての生活に入ることになる。三九歳で父親が亡くなるとダルドはムハマディヤ派の正統後継者サッジャーダナシーンとなり、以後一七八四年にこの世を去る迄この地位にあつた。

こうして青年期以降の三十数年間をスーフィーとして生きたダルドが好んだものが二つあつた。それは音楽と詩である。元来ナクシュバンディー派は音楽を禁じているが、ダルドはこれも当時の著名なスーフィーであつたシャー・サアドゥッラー・グルシャンを通じて音楽への興味を高め、遂には自分で作曲するほど音楽に精通するに至つた。彼の家では毎月二日と二十四日に宗教音楽会マフフィレ・サマーが開かれたが、当日はデリー中の有名音楽家や歌い手が参集してダルドに教えを乞うたという。時の支配者であつたシャー・アーラムⅡもこの宗教音楽会に出席していたが、ある日足が痛くなつて投げだしたのをダルドに見咎められ厳しく窘められたという話しが残つている。ダルド自身はナクシュバンディー派の流れを汲みながらも音楽を愛好したことについて、自分のサマーはアッラーに与えられたものである、といささか言訳的な説明をしている。尚ダルドが薫陶を受けたシャー・グルシャンというのは北インドの地にウルドゥー詩流行のきつかけを作つた詩人ワリーがデカンのアウランガーバードからデリーに上つてきた時に彼にウルドゥー語による詩作を勧めたという人物に他ならない。ワリーがデリーを訪れたのが一七〇〇年でダルドが生まれたのが一七二〇年とその間に二〇年の開きはあるがワリーとダルドはこのシャー・グルシャンによつて間接的に結ばれていることになる。実はダルドの父親ハワージャ・ムハンマド・ナースィルの詩号アンダリーブはこのグルシャン即ち花園に連関してアンダリーブつまりナイチンゲールとなつたものであり、ダルドという詩号もまたグルシャン→アンダリーブの連想から胸の痛み、恋の痛みを意味して選ばれたのである。ここにはいわば師匠の雅号の一字を貰うといつた形と同じ発想が見出だされるわけである。

さて、ダルドが音楽と共に好んだものに詩がある。彼はそ

の生涯にウルドゥー詩集一冊とペルシャ詩集一冊それに凡てペルシャ語で書かれた宗教的小冊子十冊ほどを著わしているが文学史上にダルドの名を留めているものがその卓越したウルドゥー詩であることはいう迄もない。手元のウルドゥー詩集（一九六二年ラホール版）を見ると抒情詩ガザルが一二七四詩句、四行詩ルバーイー五行詩ムハンマス等が四十篇許りと知れるが、彼のガザルは一篇が五詩句から七詩句位いのものが多く結局集録されているガザルは二百篇余となり有名詩人の詩集としては少ない方といえるかもしれない。もつとも、彼が生涯に詠んだガザルは遙か多数に上るが自分自身で選択して良い作品だけを残すようにしたので数が少なくなつたのであると説明されている。

ダルドの詩で特長的なのはその中にパトロンなどに捧げる頌詩であるカスィーダがないという点である。この一事によつても彼が他の職業的詩人達とは異質なスーフィー詩人であつたことが窺われるのである。彼は決してアミールやワズィールなどの権力者や、支配者たるバードシャーのもとにさえ出向かなかつたといわれているが、彼がカスィーダを捧げるような、或いは捧げることを必要とするような世俗の人物は存在しなかつたわけである。

ダルドは月に一、二回家で一般にムシャーエラと呼ばれている詩会を催した。現代のウルドゥー詩壇においてもこのムシャーエラは非常に盛んであり、有名無名詩人達の作品発表の舞台としてまた詩の愛好者にとつての楽しい場としての役割を果しているが、ダルド主催のムシャーエラにも当時の一流詩人ミールやソウダー、ソーズなどを含むデリーの有名詩人が集まつたという。「ウルドゥー文学史」（一九六四年オックスフォード）の著者M・サーディク教授はこのムシャーエラに関して次のような評価を述べている。「詩作の他に彼のウルドゥー語への偉大な貢献としては彼の家で催されたムシャーエラがある。月に一、二度この会に集まつたウルドゥー詩の師匠達は会の後でウルドゥー語の改良について大いに論じあつたのである」ウルドゥー古典詩のウスタードと呼ばれている師匠達がウルドゥー語を洗練された文学用語として高めていくうえで果した役割が極めて大きなものであつたことは改めていう迄もない。

ダルドはウルドゥー詩の卓越したウスタードではあつたが決して専門的な職業詩人ではなかつた。従つて詩に関する考え方や作詩態度そのものについてのダルドの意見は可成り厳しいものがある。彼が書いた小冊子中に「ナーラ・エ・ダルド」という一冊があるがその中で彼は詩作について次のような見解を述べている。「詩作は男子がそれを己れの職業とするような術ではなく、人間の業の一つではあつても家々の戸口を巡り歩き褒美を得るような手段となすべきでもない。も

しこのようなことであればそれは物乞いの一種でありまた貪慾のしるしである」

ダルドはまた別の小冊子「イルム・ル・キターブ」の中で自分の詩作について「私は且て人の諷刺や讃辞を詠んだことはないし、また人に依頼されて詩を詠んだこともない」と述べている。こうした言葉から、ダルドが詩を詠むということを単なる楽しみや遊芸ではなく一つの厳粛な道であると考えていたことが分かるのである。後世の殆んどの職業的な詩人達にとつてダルドの言葉は痛烈な批判となり得るものではあるが、彼自身はこれを同時代の職業的詩人に対して述べたわけではないであろう。寧ろダルドが自らへの戒めとして語つているのだと思われるのである。それにまた一八世紀初期のウルドゥー詩人達を見ると全くの職業詩人というのは少なく殆どが武人かまたはスーフィーなどである。世俗を捨てスーフィー的な日々を送るに至るのも典型的な例である。

ダルドはまた詩を詠むべきものの姿として、詩文はその人の人格を写す鏡であると考えている。文は人なり、である。その結果ダルドの詩にあつては、それはスーフィーとして生きるダルドの言説と行動及び思想に一致したものでなければならないのである。次にこの点を彼の詩の実際について見ていくことにしよう。

先述の如くダルドの詩の中心はウルドゥー抒情詩ガザルであるが、まず形式の上からは、彼は短かい韻律を用いて詩をまとめている。このことは詩の平明さにもつながるわけであるが事実ダルドの詩を特長づけているのはその形式主義や修飾技巧を弄さない簡明な表現法である。

世に生まれきて此処かしこ眺むるに
目にうつりしもの　そは汝のみ
そが瑞々しさに惑うなかれ
現し世　そは幻の花園なれば
ダルドよ知るや　人はみな
何処より来たり　何処へ去るかを

こうした彼の短かく且つ簡明な詩風についてDr.サイヤッド・アブドゥッラーは「ダルドの、束縛と悲しみの器であるこの世に対してスーフィーとしての忍耐と感謝から洩らそうとして洩らせない抑えられた自己規制の感情の結果である」と説明している。とにかく、ダルドの詩語が如何に明瞭で洗練されていたかは今日に尚その詩句の幾篇もが慣用句としてまた引用によつて生き続けていることからも頷けるのである。ジャーン・ハイ・ト・ジャハーン・ハイといつた調子の言葉は響きもよくごく軽く口に上るであろう。

内容面から見た場合にダルドの詩にスーフィー的な思想を詠んだものが多いのは当然といえようが、中でも特長とされているのは神へのひたむきな愛の表現方法である。以前にワ

リーの紹介の場でも少し触れたようにガザルにおける愛イシュクにはイシュク・エ・ハキーキー真実の愛とイシュク・エ・マジャーズィー仮の愛即ち現世の愛、の二つがある。前者は神への愛であり後者は恋人を対象としている。一般的なガザルでの愛は勿論後者であるが、神秘主義詩と称されるものにはこの愛が神に対するものなのかまたは実際の恋人に向けてのものなのか判然としないものが少なくない。要するに、詩人の信仰や日常生活態度などから判断することになるわけであるが、ダルドのガザルにもこのイシュク・エ・ハキーキーとイシュク・エ・マジャーズィー両方に受け取れる詩句が沢山ある。アルターフ・フサイン・ハーリーはその「詩と詩作序論」の中でガザルの主題について論じ、仮の愛の形を借りて倫理と神秘主義の主題を詠んだものとしてダルドの詩句十篇を挙げて説明している。ハーリーのダルド観に裏付けられた主観的な解釈である。

彼の人が捲毛を恋い
　吾すべてより解き放たれぬ
囚われの身にはあれど
　心すでに解き放たれぬ

ハーリーによればこの詩句は、神への愛は他のあらゆる関係から人を解放するものである、という意味になる。こうした解釈が間違いであるとは勿論いえないがこの詩句を、恋人を思う余りすべてを忘れ恋の罠に囚われて身動きできないが心は無限の愛の期待に溢れる、というように感じ取つても差支えないであろう。また例えば

花も花園も吾を楽しませず
　恋人なき園　吾を楽しませず

という詩句の恋人（ヤール）を神と取つても現実の愛人と考えてもどちらでも説明はできるが、余り神秘主義に拘泥していると詩句から伝わつてくる筈の自然な人間的感興も殺がれてしまう。一般の聴衆にとつては自分らなりの解釈でこの現世の愛を詠んでいると感じられる詩が強い興趣を呼ぶわけである。ダルドが呼びかける恋人が果していずれであるのか一概にはいえないが、彼自身の言葉によれば仮の愛は真の愛に達するための段階でありまた仮の愛であつてもそれが誠実な愛であり己が精神的導師であるピールに対する愛は肯定されるのである。

約言するにダルドのガザルの卓越さはそれが真のスーフィーの詩であつて、尚且つガザル最高の主題である愛イシュクを清澄な響きで感銘深く歌いあげている点に存するということができよう。デリーに生まれ死ぬ迄デリーを離れなかつたダルドはウルドゥー古典詩においてデリー派と称される多くの詩人達の中でも本当の意味で殆ど唯一の純粋なデリー派詩人であつたといつてもよいと思うのである。